

武蔵野日曜聖書講筈

暴風雨

——マタイ伝第8章18～27節——

1995年2月12日

小池辰雄

大地震 人生の嵐 イエスは眠り居給う キリスト一切 イエスは宿無し 徹底的な神信頼
魂之霊の人間を相手に 大平安の中で

【マタイ8】

18 さてイエス群衆の己を環めぐれるを見て、ともに彼方の岸に往かんことを弟子たちに命じ給う。19 一人の学者きたりて言う『師よ何処いずこにゆき給うとも、我は従わん』20 イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は罅ねぐらあり、然れど人の子は枕する所なし』21 また弟子の一人いう『主よ、先ず往きて我が父を葬ほうむることを許したまえ』22 イエス言いたもう『我に従え、死にたる者にその死にたる者を葬らせよ』

23 かくて舟に乗り給えば、弟子たちも従う。24 視よ、海に大なる暴風あらしおこりて、舟、波に蔽おほわるるばかりなるに、イエスは眠り給う。25 弟子たち御許にゆき、起こして言う『主よ、救いたまえ、我らは亡なぶ』26 彼らに言い給う『なにゆえ臆おそするか、信仰うすき者よ』すなわち起きて、風と海とを禁いましめ給えば、大なる風なぎとなりぬ。27 人々あやしみて言う『こは如何いかなる人ぞ、風も海も従うとは』

●大地震

こないだ（1995年1月17日）は、神戸を中心に大変な地震で犠牲者が六千人以上も出て、おもわぬ大災害でした。あちらの方の人もそんな大地震が来ることは夢にも思わぬわけですが。私はその自然現象の奥に神さまの日本に対する警告があると思う。

大体、大方の日本人は宗教の世界を持たない。神を畏れる面が非常にうすい。教育者そのものがダメなんです。リンカーンが

「アメリカのデモクラシーはアンダーゴッドである」
と言いました。

「神の下において」

ということ。単なる民主主義ではダメです。その点で、日本の大方は神仏に対する畏



敬の念がない。ただ経済的なことだけを考えているような日本は一遍ひっくり返る必要がある。その嵐の前ぶれみたいだ。或はある意味において嵐だった。こないだの現象において、私はそういうことを感じました。

なんといつても、欧米の世界は福音が、キリスト教が——キリスト道と言いたいが——これが伝統的に歴史の中の大事な底流をなしている。そういうものが日本にはない。仏教なんていつたつて、お葬式の時だけ坊さんに頼んだりして、普段は全然、宗教とは関係ない。こんな日本では、教育者自身が心の中に宗教の世界を持っていない。教育者自身がまず魂の世界を本当に持たなかったら、教育なんかできるかと思う。正直、情けない。その一つの犠牲がこの大震災で、なかなか大きな犠牲でしたけれども、これは神さまの警告であると思いました。

「犠牲者たちは向こう側に行つて、神の声を聞いて目覚めて、日本のために天界から祈っている」

ということではないかと思えます。大体、キリスト教の人たち自身もそのような烈々たる気持を持たないようだったら、

「何がキリストの僕か」

ということになる。

● 人生の嵐

神さまの日本に対する警告に目覚めなければ、いつまでたつてもダメです。クリスチャンは神の言を神の業わざにおいて見ていく、聞いていく。業に裏付けられた言葉が本当の言葉なんです。聖書はみなそうです。

「初めに言葉あり」

ではない。

「初めに行為あり」

です。これはゲートルが、あのヨハネ伝の第1章1節を「初めに行為あり」と言った。さすがはゲートルですね。

「それを忘れるな」

ということですよ。

私の小学校からのベテランの先生方を思うと、やはり行為に裏付けられた言葉であった。言葉だけの言葉ではダメだ。何も言わなくても、行為そのものが言葉なんです。

神の怒りのわざが、警告のわざがこないだの西の方の災害であった。地震ではない。本当の意味での天災、天からきた災いなんだ。普通、天災という言葉は非常に軽く使っているけれども、本当の意味の天災というのは神の意志こころが隠れている。

ゲートルは、自然現象の奥に霊的な神の意こころを読んだ。そういう詩人がいつたい、日本にい



るかというんだ。漱石さんあたりでもダメです。徳富蘆花はある程度持っていました。あの人は内村鑑三の影響で福音に接していましたから。

人生には、そのような嵐がある。私の人生にとつての嵐は、北京で兄が仆れ、帰りには母が失明してしまった。あれが私の人生の嵐でした。惨憺たるもので、それから、私は本式に聖書を読みだした。アウグスティヌスが、子供たちの歌で

「トレ レゲ」(取りて読め)

というのを聞いて聖書を開いたという話がありますが。私には、兄貴がしょっちゅう聖書を読んでいたので、その兄の姿そのものが実は無言の伝道であつた。今でも鮮やかに私の目に残っております。小石川の同心町の借家の二階屋で机を並べていましたから。あそこらはみな焼けてしまつて、無くなつてしまつた。

私は大学に入った時に、最初の日曜日に藤井武先生の家に出かけていった。3月7日ですけれども、雪が降っていた。先生はその時に私に『聖書の結婚観』という先生の本を下さつた。そして、

「小池君の兄さんは一人に一人いるかいないかという人だつたよ」

と言われた。これは忘れられない言葉です。

今日は特別に、西の方の嵐をおぼえて、「暴風雨」という題にしたわけです。その神の意を日本人は知らないで、ただ災害と思つたらいかん。なにしろ、本当の宗教を持たないことが大方だから困つたものだ。私は91歳だけでも、まだこれから100歳を突破するような気持でもつて福音のために戦います。

●イエスは眠り居給う

マタイ伝8章18節から27節の記事は、ルカ伝では8章22節から25節、マルコ伝では4章35節から41節のところですよ。マタイ伝8章の、

20 イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は罅あり、然れど人の子は枕する

所なし』

24 視よ、海に大なる暴風おこりて、舟、波に蔽わるるばかりなるに、イエス

は眠りい給う。

まあ、イエスは大変なひとです、

「イエスは眠り居給う」

というこの事実が。神さまに本当に信頼しているイエスは、

「暴風雨が来たつてこれは沈まない」

という確固たる信仰がある。だから、眠っている。100人のうち99人がいろいろ心配したり騒いだりする。ところが、イエスは眠っていた。

我々は、人生にいろいろなことが起きます。その時に、



「主よ、まーい」

と、その一言で勝ちます。腹わたからキリストに叫んで——無言の叫びで結構です——それでもう勝つてしまおう。ああだこうだといういろいろなことを考えたり、工作したりする必要はない。これが

「イエス眠り居給う」

という信頼なんです。神信頼の極致です。人生にはいろいろなことが起きる。その時に、「イエス眠り居給う」を忘れないように。

「私も寝ていよう」

と、騒がない。

これは詩篇46篇——ルターの好きな詩篇——に似たような言葉がある。

「神はわれらのさげどころのい避所また力なり、なやめるときいの最ちかき助なり。2さればたとい地はかわり山はうみの中央もなかにうつるとも、我われら儕はおそれじ。3よしそいの水はなりとどろきてさわぐとも、その溢れきたるによりて山はゆるぐとも何かあらん。

これは素晴らしい言葉だ。ルターはこの詩篇46篇が好きなんです。

「静かにしている」

と。そうすると、

9 エホバは地のはてまでもたたかい戦闘をやめしめ、弓を折りほこ戈をたちいくさぐる戦車を火にてやきたもう。10 汝等しずまりて我の神たるをしれ。

「汝等しずまりて我の神たるをしれ」

この言葉です。

「汝等しずまりて我のキリストたるをしれ」

ということ。キリストはそのようにして神さまにより頼んで眠っていた。

10……われはもろもろの国のうちにあが崇められ、全地にあがめらるべし。11万軍のエホバはわれらと偕なり。ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり。」(詩篇46・1:11)

烈々たる言葉だね。聖書の霊的現実はいよいよ。

「意味がどうだ」

ではない。この現実¹に自分を投げ込んで、聖書の言葉の現実²に入っていかなければね。

●キリスト一切

私は何をしゃべっても、キリストを告白しているんですから。キリスト一切です。

「我みずから何事をも為し能わず」(ヨハネ5・30)

「わが教おしえはわが教にあらず、我を遣わし給いし者の教なり」(ヨハネ7・16)



と。

「我はなに^{ごと}とも教えることができない」

とはヨハネ伝のキリストの言葉です。キリストは神一切なんだ。だからキリストのことを

「無者」

と言っている。何も無いひとだ。そうすると、

「無即無限無量」

の世界に入る。私たちもキリスト一切だということ——ゼロで結構なんだ——

「ゼロ＝無限大」

になる。与えられたる、賜りたるゼロ、賜りたる無は一番凄いです。自分で悟って無になるのではない。禅宗ではない。禅宗の無よりか福音の無の方が凄いなだよ。この無は虚無ではない。この無は即無限無量の凄い土台なんです。キリストは無者、無限無量者です。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言えるんだ。

「自分は何も言えない、何もできない」

というキリストが

「私を見た者は神さまを見た者だ」

という。

「¹⁴祭も、はや^{なかば}となりし頃イエス宮にのぼりて教え給えば、¹⁵ユダヤ人あやしみて言う『この人は学びし事なきに、如何にして書^{ふみ}を知るか』。¹⁶イエス答えて言い給う『わが教^{おしえ}はわが教にあらず、我を遣^{つかわ}し給いし者の教なり。¹⁷人もし御意^{みこころ}を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。¹⁸己より語るものは己の栄光をもとむ、己を遣しし者の栄光を求むる者は真^{まこと}なり、その中に不義なし。』(ヨハネ7・14～18)」

これがキリストなんだ。キリストはモーセ以上の世界だから。イエスを自分のうちに宿すと、また、イエスの中に自分を入れると、これは本当の平安です。本当の平安というのはもの凄く力を持っている、光を持っている。キリストが神の子であることを「信じ」たつて何になるか。そんな観念信仰はダメなんだ、一つにならなければ。パウロは本当にキリストと一つでした。

「我れキリストのうちに、キリストわが中に」

と言った。キリストとの一如の世界に入っている。これは「信じ仰ぐ(信仰)」ではない。信じ交わっている世界(信交)です。霊的な交わりの世界(神交)に入っている。

「私は信仰、なんかありません」

というのは、信じ仰いでいるような「信仰」はしようがないということですよ。



「わがうちなるキリストが見えないか」

と言えなくてはダメです。ボロの中に金剛石がある。ボロの中に泥があるかと思つたら、金剛石(ダイヤモンド)だ。立派な器の中に何があるかと思つたら、泥があつた。そんなのがたくさんある。人は上辺を見るけれども、神さまは内側を見る。パウロは自分のことを

「ちりあくた塵芥の如し」

と言つた。塵芥の如きパウロが実は金剛石をもっている。

賀川豊彦という人が、弱い人や貧しい人や困っている人と友だちになつて本当に泥まみれになつて、実存そのもので伝道していた人です。それが本当の伝道者ですね。私の育つた無教会というのは言葉が多すぎる。内村鑑三や藤井武先生は単なる言葉の人ではありませんけれども、とかく無教会は言葉が多すぎる。

「聖書研究会」

だなんて。誰も

「聖書身読会」

とは言わない。「研究、研究」と言っている。研究という言葉は躓きです。内村先生の雑誌が『聖書之研究』という雑誌だからね。ギリシヤ語やヘブライ語を勉強して、

「聖書は原文で読める方がより分かる」

なんて、冗談言うな。日本語でたくさんだ。本当の言葉はギリシヤ語でもヘブライ語でも日本語でもない。その奥の神の響き、神の言です。音楽だよ、霊楽だ。女の人で祈りが深くなつて霊歌を歌う人がある。あの霊歌の中身は分からない。

●イエスは宿無し

狐は穴あり、空の鳥は^{ねぐら}塹あり、然れど人の子は枕する所なし。

とある。枕する所のない人の子——「人の子」とはキリストのこと、これはダニエル書に出てくる暗号的な言葉です——枕する所のない人は至る所を枕にする。石の上でも、草の上でも。呼ばれば、誰の家へ行つても、そこをお宿としている。イエスは宿無しだから。宿無しは至る所を宿にする。自由自在だ。押し込んで行かない。招かれれば、喜んで行きます。押し込んで、

「泊まらせろ」

なんてことはキリストは言わない。だから、嵐の中のひっくり返りそうな舟の^{とこ}艫に寝ているんだ。

寝る時には、

「主さま、あなたの御懷の中で眠ります」

と言つて寝たら、必ず安眠できる。

私の著作集第十卷(『聖書は大ドラマである』9月23日「人の子は枕する処なし」)にこう書い



てある。

「狐には穴がある、空の鳥には樹の中に罫がある。ところが、人の子、私には枕するところが無い」とイエスは言った。彼には一定の宿るところがない。無宿者である。石枕、草枕、或いはイエスを迎えるどんな人のところにも一夜を明かす。この場合は弟子たちと舟に乗っておられた。ところがガリラヤ湖上を暴風が吹きまくってきた。舟は波をかぶるばかりになった。それでもイエスは眠っていた。艫の方に茵を枕として(マルコ4・38)。弟子どもは舟が沈むと言って恐がってイエス呼び起こした。イエスは風と波に「黙せ、鎮まれ」(マルコ4・39)と叫んだ。すると大いなる風となった。そして弟子たちに「なぜそんなに恐がるのか、信仰なきは何ごとか」(マルコ4・40)と言った。枕するところなき「人の子」キリストは到るところを枕とする人であった。いつ、いかなる処でもそこを神のふところとして眠ることのできる平安の魂であった。彼の信仰の現実、我々がどこにいても空気の魂であるように、いづこでも神のふところの中、み腕の中であった。我々がいつどこであろうと我れキリストの中、キリストわが内という現実が身について来たり、えらいことになる。それを身を以て証したのは、実に使徒パウロであり、且つペテロ、ヤコブ、ヨハネであった。信仰とはまさに信交という現実となつてこそ本ものである。祈りの魂でみ霊の内住が身につくことを要する。」

●徹底的な神信頼

では、マタイ伝8章にもどります。

18 さてイエス群衆の己を環れるを見て、ともに彼方の岸に往かんことを弟子たちに命じ給う。19 一人の学者きたりて言う

「学者」というのは旧約に詳しい人のことです。

『師よ何処にゆき給うとも、我は従わん』²⁰ イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は罫あり、然れど人の子は枕する所なし』

「お前は大丈夫か」と言っている。

21 また弟子の一人いう『主よ、先ず往きて我が父を葬ることを許したまえ』

22 イエス言いたもう『我に従え、死にたる者にその死にたる者を葬らせよ』

この訳は間違っている。

「死にたる者は葬儀屋に任せよ」

ということです。

「死者は葬儀屋に任せろ。お前は福音の世界にまっしぐらに進んで来い」ということ。

23 かくて舟に乗り給えば、弟子たちも従う。24 視よ、海に大なる暴風おこりて、



舟、波に蔽おほわるるばかりなるに、イエスは眠り給う。

これです。沈まないという、徹底的な神信頼です。どんなに荒れても騒がない。人生のいろいろな嵐みたいな事に我々はでつくわす。その時にうろたえないことです。この

「イエス眠り居給う」

ということをお忘れないように。「私も寝てみよう」と。

「汝等しずまりて我の神たるをしれ」

という。詩篇46篇の「神は」と書いてあるところは「キリストは」といつて読めばいい。

「うろたえないで、我のキリストたるを知れ」(詩篇46・10)

ということ。

「知れ」

というのは、

「身体で受けとれ」

ということ。 「知る」というのは、全存在で受けとることを「知る」というので、頭で知るのではない。

マタイ伝8章24節は非常に著しい言葉です。舟がひっくり返りそうになっても、キリストは寝ていた。あわてない。とやかくと工作しない。

「汝ら静まりて我の神たるを知れ」

「汝ら静まりて我のキリストたるを知れ」

「キリストたることを身をもつて受けとれ」

ということ。 本当の神信頼、キリスト信頼は、うろたえないで黙ってそこで祈り入る。言葉にならないような祈りの世界です。祈り入って、魂が平安の世界に入ると、それ自身がもう既に勝利ですから。祈りそのものが勝利のような祈りです。

「これからどうなつてください」

ではない。

「何もうろたえません。一切をお任せいたします」

ということ。

「たとえ地獄に落ちても」

と言ったあの親鸞の信仰は素晴らしかったね。親鸞というのは非常に福音的な魂の人です。法然はイザヤみたいだけれども、親鸞はエレミヤみたいだ。とにかく、法然、親鸞というのは傑物だな。

●魂之靈の人間を相手に

私は『人物列伝』(『霊界の星々』)というものを今、書いていますが、これはもちろん宗教的な人物、霊の人物です。最澄、空海、法然、親鸞、日蓮。女性では、蓮月というのがいる。



アッシジのフランチェスコ、ルター、ダンテ、いろいろいます。キルケゴール。フランスの『レ・ミゼラブル』を書いたヴィクトル・ユゴー。イギリスではミルトン、ブラウニング。

私は勉強して読んだり書いたりいろいろだ。魂たましひ之霊の人間を相手にして生きている。今の教育者はそういう魂の世界を持たないで、何が教育かと正直言いたい。もうこれからは私は段々、憎まれっ子で結構だ。パウロが

「お前たちは人に喜ばれようとするか。そんなことではダメだぞ、キリストに喜ばれろ」

と言っている。本当のことのためには、どこまでも戦っていきます。何と思われようと構わない。

20 イエス言いたもう 『狐は穴あり、空の鳥は罅ねぐらあり、然れど人の子は枕する

所なし』

24 視よ、海に大なる暴風あらしおこりて、舟、波に蔽おほわるるばかりなるに、イエス

は眠り給う。

凄いね。まず、百人のうち一人だね、「イエス眠り居給う」ような現実に本当に魂たましひのあぐらをかいている人は。とにかく、

「イエスは眠り居給う」

という、この一言が、この一つの事実が大事です。嵐の中でも眠っているような人。

「ひっくり返るかどうか」

とみな大騒ぎしている時に、キリストは眠っている。そして、起きざまに、

「鎮しずまれ」

とえば、風波が鎮まつてしまった。

26 彼らに言い給う 『なにゆえ臆おそするか、信仰うすき者よ』すなわち起きて、

風と海とを禁いめ給えば、大なる風となりぬ。

これは大変なひとだ。いやはや、そういう大変なひとです、イエス・キリストというひとは。日蓮だって何だって、キリストにはかなわない。だから、福音書を読んで、これに圧倒されて読まなければダメです。キリストにとつ捕つかまって、

「参りました!」

と言って降参すると、そのキリストの世界に入れられる。降参しなければダメだ。

「どういう意味だ」

なんて、何を言っているか。

「参りました! 降参します!」

と。そうすると、キリストが捕まえて入れてくださる。私は本当に今、火のように魂が燃えているんですよ。皆さんも、聞きながら燃えてくださらなくてはね。熱くしてしようがない。



●大平安の中で

こないだ、私は伊豆の方の山小屋に行つてたんですけども。いや、太平洋を見ていると、素晴らしいね、この太平洋という大海は。大島が浮かんでいる。日本は太平洋を自分の池のように持っているんだから、これは大変なもんです。ああいう大自然には私は感激するんだけどね。そこから太陽が昇ってくる。朝日が海から昇ってくるところはいいねえ。時々、大自然に接してくださいよ。山でも海でもいいです。たまには、みんなでひとつ、そういった旅行をしてもいいんだね。

そして、大自然の中で魂いっぱい讃美歌を歌うといい。讃美歌を歌うのは大事なことです。うまく歌うのまずく歌うのということではない。魂をこめて歌う。私は自分の讃美歌をだいぶん作つた。作らざるを得ない。普通の讃美歌には気のぬけたような讃美歌があるから。人生にはいろいろな嵐がある。私にとっては、兄貴が仆れて母が失明して、あの時は本当に参つた。あれは私の人生の嵐だつた。それから、聖書の世界に食いついた。聖書研究ではない。聖書身読です。この聖書の言葉はビリビリ来るからね。

あなた方は、そういう気持で聖書を読んでいらつしやるでしょうね。止められないですよ。なにもたくさん読む必要はない。好きなところをしつかり読む。パウロのローマ書なんかやはり凄いね。

「ローマ書8章は新約の、指輪の金剛石(ダイヤモンド)である」

と内村先生がいつか言っていた。旧約でいうと、イザヤ書の40章から55章まで。詩篇23篇、46篇、84篇……。なにしろ、

「聖書は、力が来て光がきて生命が来てしょうがない」

という本ですから。なかには、もちろん、どうでもいいようなところもあるけれども。

皆さんは人生のいろいろな暴風雨にお遭いになる。しかし、そこで「イエス眠り居給う」という大平安の中でもつて勝つ。今日は

「イエス眠り居給う」

という一言でたくさんだ。

言葉の究極のところは沈黙です。

「沈黙の言葉、黙つてグーツとその世界に入る」

という、無即無限無量のところに入る。もういくら言ってもきりがなから、止めますけれども。

「狐は穴あり、空の鳥は罅あり、然れど人の子は枕する所なし」

「視よ、海に大なる暴風おこりて、舟、波に蔽わるるばかりなるに、イエスは

眠り居給う」

マタイ伝8章20節から24節、これは人生にとって非常に大事なところだと思います。

